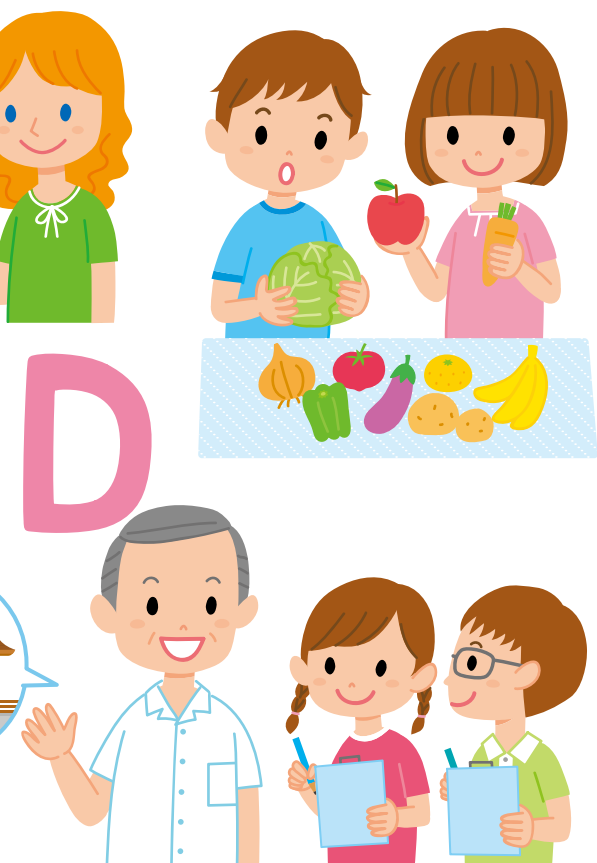


未来を創る
子どもたちを育てるために…

ESDを 理解しよう

グローバル化が加速する一方、地球規模の環境破壊や資源不足などが問題になる現代社会では、人類が今の生活レベルを維持しながら、次世代も含む全ての人々により質の高い生活をもたらす開発や発展を目指すことが重要な課題となっています。そのために、日本は「ESD(持続可能な開発のための教育)」を推進しています。今回は、これまで行われた取り組みと学校現場での取り入れ方について、ESD研究の取りまとめを担当された、角屋重樹先生にお話をうかがいました。

取材・文 | 金丸教子 イラスト | あきんこ



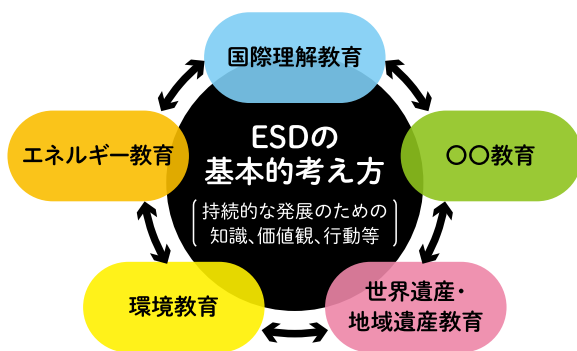
「持続可能な社会づくり」の 担い手を育てる教育がESD

ESDとは「Education for Sustainable Development(「持続可能な開発のための教育」)の略称で、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身につける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う教育という意味です。

「持続可能な開発」とは、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たす開発」を意味します。根底には、環境の保護と開発とは共存できるものであり、環境保全を考慮した節度ある開発が重要だという考えがあります。

このような概念が初めて国際会議で提起されたのは1980年代です。その後日本政府は2002年のヨハネスブルグ・サミットで、環境問題に限らず、一人ひとりが地球規模の視野をもって考え、持続可能な社会づくりのための担い手となれるような力を育む教育が必要だとし、「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」を提案。同年の第57回国連総会で、2005年からの10年間を「ESDの10年」とする決議案が採択され、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が推進機関に指名されました。日本国内では、内閣に係省庁連絡会議が設置され、2006年3月に国内実施計画が策

図1 ●ESDの基本的な考え方



*〇〇の部分には人権、平和、食(育)などが入る。
(出典：文部科学省「持続発展教育」)

定されました。

その実施計画においては、「持続可能な開発」という概念が環境保全を目的とした課題を入り口として、「環境保全を中心とした課題を入り口として、世界規模の持続可能な発展につながる諸課題を視野に入れた取り組みを進めていく」とされています。しかし、ESDが関わる分野は、今や環境教育だけではなく、エネルギー教育、国際理解教育、人権教育など多岐にわたります。教育場面では、これらを個別に取り上げるだけではなく、いろいろな方法を用いてつなげ、総合的に取り組むことが重要になります(図1)。

なお、ESDの理念は、「生きる力」の理念にも通ずるものです。持続可能な社会づくりの観点は学習指導要領にも盛り込まれ、一層の充実が求められています。



PROFILE

角屋 重樹 先生 *Shigeki Kadoya*

日本体育大学児童スポーツ教育コース主任。専門は教科教育、理科教育。広島大学教育学部教授、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部長などを経て2013年4月から現職。平成22～23年度「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究」に携わる。

図2 ● ESDの視点に立った学習指導の目標

●6つの構成概念

1 多様性 いろいろある	2 相互性 関わり合っている	3 有限性 限りがある
4 公平性 一人ひとり大切に	5 連携性 力を合わせて	6 責任性 責任をもって

教科等の学習活動を進める中で、
「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身につける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

●7つの能力・態度

- 1 批判的に考える力
- 2 未来像を予測して計画を立てる力
- 3 多面的、総合的に考える力
- 4 コミュニケーションを行う力
- 5 他者と協力する態度
- 6 つながり方を尊重する態度
- 7 進んで参加する態度

(出典：「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究」)



ESDをESDDたらしめるのは
有限性・未来予測性・自己制御

ESDの実践は、国立教育政策研究所が研究を始めた2008年時点で、すでに多くの例がありました。しかし、「何をもってESDとよぶか」という、学校教育における定義が明確になっていませんでした。そこで私たちは、まず授業実践に基づいて検証を重ね、ESDを図2のように定義づけました。また、各実践の共通項として、6つの「持続可能な社会づくりの構成概念(例)」と、7つの「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)」を抽出しました。

さらにこれらを収斂するキーワードとして、私は「有限性」と「未来の予測」「自己制御」の3つを挙げたいと思います。

「有限性」とは、社会を構成する物事や人の関係には限りがあると認識することです。例えば、エネルギーや物質といった「有限」な資源に支えられている人間社会は、その資源のある限りにおいてしか発展することができません。物質だけでなく、人と人との関わりにおいても——特に国際問題の場合——人はどうしても自国民の利益を優先しますから、どこかで必ず利害の衝突が生じます。このように、「ものごとには限界がある」ということを知るのは、ESDに不可欠な要素です。

また、持続可能な社会づくりのためには、過去や現状を知るまでで終わるのではなく、未来がどうなるかについて考え、見通しをもつ必要があります。これが「未来の予測」です。

そして、将来も持続可能な社会を継続させるためには、今の自分たちの暮らしや経済活動の在り方を変える(制御する)必要があるという結論にたどりつきます。これが「自己制御」です。

現実にあるものの有限性を理解し、予測できる未来像に基づいて、自分の行動を変える。これこそが「持続可能な社会」をつくるESDの本質だと言えるでしょう。

指導への 取り入れ方と ポイント



単元の学習目標などに 「持続可能性」を加える

ESDで育みたい力には、多面的で総合的なもの見方、多様性の尊重、批判力、情報収集・分析能力、コミュニケーション能力などが挙げられます。これらは全て「総合的な学習の時間」を中心に育成を図る「問題解決能力」に関連した力です。

しかし、「総合的な学習の時間」で行われている学習が全てESDになるわけではありません。前にも述べたように、ESDを実践するには、問題解決型の学習に「持続可能性」という視点を付加することが必要です。

ただし、子どもの発達段階を考慮した場合、低学年のうちから「持続可能な社会」について考えさせるのは難しい面もあるかもしれません。低学年では、未来予測といっても、明日のことか、せいぜい1週間くらい先を予測することで精一杯だからです。したがって、本格的な実践ができるのは、中学年以上になってくるでしょう。

ESDの実践にあたっては、前述した6つの構成概念と7つの能力・態度を各教科等・単元の学習指導案の目標の中に組み込んでいきます。もちろんこれら全てを盛り込む必要はありません。その教科・単元で実践可能なものをいくつか選び、従来の目標や評価規準などに付加していくとよいでしょう。

事実を「教える」だけでなく、 未来を「考えさせる」ことが大切

教科横断的な「総合的な学習の時間」は、テーマを自由に設定できることから、ESDが最も実践しやすい時間だと言えます。しかし、他の各教科の中でも、実践は十分に可能です。図3は、それぞれの教科でESDを実践するときのポイントを簡潔にまとめたものです。

例えば、社会科で歴史を学習する場合、過去のできごとや人物の業績を学んだところで終わってしまいがちです。しかし、学んだことが将来どう役立つのか、現在や未来の社会にどうつながっていくのかがわかれば、子どもたちにとって、歴史学習はもっとおもしろいもの変わってくるはずですよ。

確かに、各教科の学習事項は学習指導要領で細かく定められており、授業時間も限られています。それでも、扱うテーマに合わせて、「未来はどうなるのかな」という疑問を投げかけてみることは、どの教科でも可能です。授業中に答えを出す必要はありません。たとえ具体的な課題に取り組みなくても、未来について考えるきっかけを与えるだけで、子どもたちの意識は少しずつ変わってきます。

ESD固有の価値を

日々の実践に結び付けていこう

日本がESDに取り組み始めて10年近

く経ちましたが、実践の成果や学習指導の変化が出てくるのはこれからだと思います。国立教育政策研究所では、2012年3月に「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」の最終報告書をまとめました。こういった資料を出すことで、すばらしい試みが増えてくるものと期待しています。

気をつけたいのは、ESDを強調するあまり、「まずESDありき」の教育をしようとしてしまわないことです。教育がもつ本質的な価値の中にESDの要素を付け加え、子どもたちが、世の中には様々な考え方があることを知ってものの見方を広げ、結果として未来の持続可能な社会をつくるために必要な力を身につける。それが、ESDの本来の目的であることを忘れないでほしいと思います。

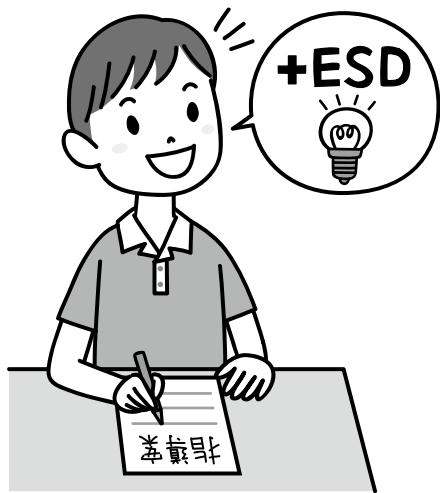
難しく考える必要はありません。まずは教師自身が、「未来の社会を考えてみよう」という視点をもって、日々の授業に臨んでみてください。

★P5・6で実践例を紹介しています。



図3 ● 教科ごとのESD的視点の取り入れ方

<h3 style="text-align: center;">国語</h3> <p>キーワードは「関わり」です。例えば、言語活動の「話し合い」は、自分の考え方と他者の考え方を対立させ、どこが同じでどこが違うのか、お互いに欠けた部分を認識するものです。こうした活動の中で未来を予測することは、ESDとして非常に有効になります。ひとりではなく、皆で話し合うことによって未来を予測すれば、それは確たる予測になり、独断と偏見を避けることができるからです。</p>	<h3 style="text-align: center;">算数</h3> <p>算数で培った力は、未来社会を予測するための土台になります。私は過去に、「10年後のまちの様子を予想して、自分たちの家を設計する」という授業を見たことがあります。「総合的な学習の時間」での実践でしたが、限られた敷地面積をどのように有効に使うか、どれくらいの電力が必要なのかを計算するのは算数の力であり、その力を大いに生かした学習でした。</p>	<h3 style="text-align: center;">社会</h3> <p>ESDを最も実践しやすい教科である一方、ともすると事実認識や知識の確認で終わってしまい、肝心の実践にまでつながらないことも多い教科です。ESDの実践とするには、これまでの歴史的事実や地理的状況などをふまえた上で、子どもたちに未来を予測させることを意識して授業を進めていく必要があります。</p>
<h3 style="text-align: center;">理科</h3> <p>自然界の法則や自然現象の認識にとどまてしまいがちなので、それらをもとにして未来予測をする方向に導いていくことがカギです。例えば、地球に隕石が衝突したことで環境が激変し、恐竜が絶滅したようなことは、未来にも起きる可能性があります。そこから、環境に大きな影響を与える地震や火山噴火に強いまちづくりを考えさせれば、ESDの実践になります。</p>	<h3 style="text-align: center;">外国語活動(英語)</h3> <p>外国語を勉強する究極的な目的は国際理解です。言語は、その背景に、それぞれに異なる文化や考え方の違いをもっています。ESDの実践においては、互いの文化の共通点や違いを認識することで国際理解を深め、人類が皆、未来に向かって幸せに生きるにはどうしたらよいかを考えるきっかけを与えることが大切です。</p>	



➔ ESDの実践例を掲載したウェブサイトをいくつかご紹介いたします。指導の参考にお役立てください。

**ユネスコスクール
公式ウェブサイト**
<http://www.unesco-school.jp/>

◀「ESD教材活用ガイド」の閲覧・無料ダウンロードが可能。また、「教材ルーム」では、ESD関連の教材や書籍・冊子なども紹介していて、閲覧可能なものもある。

**NPO法人
日本持続発展教育(ESD)
推進フォーラム**
<http://www.jp-esd.org/>

▶フォーラム主催の「ESD大賞」受賞校の実践集などを掲載。「ESDライブラリ」では、ESDに関連する各企業の教材が紹介され、無料でダウンロードなどもできる。

参考
学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究
「最終報告書」 http://www.nier.go.jp/kaiatsu/pdf/esd_saishuu.pdf

参考にしたい、ESD 実践例

角屋先生のお話を受け、ここでは、現場でのESDの実践例と授業のポイントについて紹介します。東京都多摩市立豊ヶ丘小学校による、各教科をつなぎ学びを深める「総合的な学習の時間」を例に見てみましょう。



単元名

「未来に向かって、小さな一歩を踏み出そう」

～提案します！ 私たちができること～

単元目標

- * 地域の環境を守る活動の意義や、活動をしている人の思いを知り、自分たちにできる取り組みを調べて、実践しようとする態度を育てる。
- * 環境問題を自分たちの暮らしと結びつけてとらえ、これを解決しようという思いや、地域の環境を大切にしようとする態度を育てる。

学習内容

地域で行われている環境を守る活動をふまえて、よい未来をつくるために自分たちにできる取り組みを考え、発表するというもの。地域の活動を調べる際は、グループごとに清掃工場などの関係施設への聞き取り調査を実施した。また、発表は劇やポスターセッション方式で行った。



▲学校や家庭のごみを持ち寄って分別している様子。ごみを減らすためには、自分たちの生活でどんなことを見直す必要があるかを考えるきっかけに。



▶学習したことを、保護者や地域の人たちに劇で発表する様子。

4年生

「ジャンル」環境教育・地域学習

単元名

「発見・たんけん☆貝取・豊ヶ丘」

～われら 地いき盛り上げ隊!～

単元目標

- * 自分たちを支える地域のよさや、地域のために活動している人・団体の存在を、体験を通して気づき、よりよい関係を築こうと活動に取り組む態度を育てる。
- * 地域のために自分たちにできることを考え行動することで、地域を支える一員であることを自覚し、日々の生活に生かそうとする態度を育てる。

学習内容

子どもたち自身が「地域盛り上げ隊」となって、地域の人々の活動や行事を活性化するために自分たちにできることを考え実行し、地域の人を招いて発信するというもの。クラス混合で、「放課後子ども教室」「民生委員」「清掃活動」「地域の祭り」など、課題別にグループに分かれて学習を進めた。



▲▶「どんど焼きをいろいろな角度から調べて盛り上げる」グループの活動。実際にどんど焼きのお手伝いに参加した。地域のために頑張る気持ちの大切さを体感。



3年生

「ジャンル」地域学習

ESDの授業づくりのポイント

校長先生がアドバイス

多摩市立豊ヶ丘小学校校長
小林佳世 先生

●キーワードは「学校林、地域、食育」

本校は平成23年度に、2校の統合により開校しました。そのため、まずは自分たちの地域について学び直し、地域の方々のつながりを再構築することが不可欠でした。そして、統合前から引き継いだ約7100㎡もの広大な学校自然林や食育などをESDの視点から改めて吟味しました。この「学校林」「地域」「食育」の3つをキーワードとして、「かわり、つながりを大切にし、考え実行する子どもの育成」をテーマにESDを実践しています。

これまで2年間の実践を通じて、子どもたちは多くの地域の方々と出会ってきました。学習後も交流が続く、新しい展開も見られています。

●教師は「ファシリテーター」に徹する

「総合的な学習の時間」の授業で大切なのは、児童の学びに探究のスパイラル発展的な積み重ねができるようにしていくことです。そこでは、教師が「ファシリテーター」に徹すること——従来の「与えて・させて・見回り・教え込む」指導ではなく、子どもの主体性を育む「聞いて・助けて・見守り・任せる」指導——が求められると、一般財団法人教育調査研究所研究部長の寺崎千秋先生にご指導いただきました。

多摩市立豊ヶ丘小学校

平成23年4月開校。生活科と「総合的な学習の時間」を中心に、独自のESDカレンダー(※)に基づいて、ESDの実践を進めている。ユネスコスクール加盟校。平成23・24年度多摩市教育委員会研究奨励校。

※ESDの視点からまとめた教科横断的な年間指導計画。



単元名

「多摩の過去と未来にタイムスリップ!」

～昔の人々が作ってくれた多摩、私たちが作っていく未来～

単元目標

- *多摩市の歴史遺跡や先人の働きを通して、地域と自分とのつながりを実感したり、未来の多摩市を担う自分の生き方について考えたりする。
- *身近な遺跡や資料館を見学したり地域の人の話を聞いたりして課題を意欲的に追究し、問題解決的に学習を進める力を身につけ、友達と協力する楽しさに気づく。

学習内容

埋蔵文化財センターや歴史ミュージアムなどを見学して多摩市の歴史をふり返った上で、未来の多摩市を自分たちがどう作っていくか、計画に沿って追究活動に取り組んだり、作品にまとめて発表したりする。



▲グループごとに、未来の多摩市をデザインして発表。学習のふり返りでは、「子孫のお手本となる時代を作れるように考え行動していきたい」という声が。

6年生

「ジャンル」地域遺産教育

単元名

「ネイチャー フューチャー マモルンジャー」

～2050年の食を考える～

単元目標

- *稲や野菜の栽培を通して食への理解を深め、育てたものを収穫して食べる喜びや感謝の気持ちを培う。
- *日本人の主食の変化や、自給率、食の安全などの、日本や世界の食糧事情に関する課題を設定し、意欲的に調べる。
- *学校林や食の学習を通して生活をふり返り、今の自分や大人の自分にできること、みんなのできることを実行する態度を養う。

学習内容

日本の食や環境についての課題を考え、解決のためにどんな取り組みができるか、またどうすれば取り組みが広がるかを追究し実行するというもの。人との関わりを大切にするため、農業の現状などについては、地域の方々に協力していただきながら理解を深めた。また、学習したことは劇やクイズなどで地域の方々に発表した。



◀地域の方に協力していただき、農業についての理解を深める。



▶自分たちの提案を実現するため、関係施設へ電話し、交渉する様子。

5年生

「ジャンル」食育・環境教育

た。そうすることで、子どもたちは「自分から課題に取り組み、考えて行動することができた」という達成感を得ることができ、「次はこんなことがやりたい」という主体的な活動へとつながっていきます。

教師にこの姿勢がないと、いくら子どもにいろいろな体験をさせても、自発的な問題意識は生まれず、本当の意味で子どもを育てることにはつながりません。与えられた授業ではなく、子どもが主体的に課題を探究する授業こそ、ESDだと言えるでしょう。

●「総合的な学習の時間」での「気づき」を教科の学習にフィードバックする

ESDで重視される能力や態度を育むためには、「総合的な学習の時間」や生活科の授業をしっかりとやるのが重要です。その際、ポイントになるのは、地域の方々と関わり合ったり、地域の教育資源を大いに活用したりすることです。

「総合的な学習の時間」では、教科の学びをつなげ、さらに深めていきます。その中で、教科の学習内容で指導しきれなかった部分に教師が気づくことがあります。例えば、「総合的な学習の時間」で自分たちが設定した課題に沿って夢中で話し合い、活発に意見交換する姿を見ることがある一方で、事前に教科でもう少し力をつけておくべきだったと反省することもあります。

「総合的な学習の時間」は、教科での学習を活用するとともに、そういった「気づき」を教科の学習にフィードバックして授業改善を図り、有機的なスパイラルを作っていくためにも大事な役割を果たすのです。